

トルーマン・カポーティ研究の結び

稲澤 秀夫

一、トルーマン・カポーティの実像を追って

トルーマン・カポーティの実像はどのようなものだったのだろうか。創作を通して憶測し、こうでもあつたろうと想像し、また、読み取ることにはできる。

ここでは、もつと直接に、カポーティの日常を語る五つの作品を挙げ、書評をまじえながら、カポーティの相貌の一端を垣間見ることにする。

(1) ローレンス・グローベル編著『カポーティとの対話』(Lawrence Grobel, *Conversations with Capote*, New York: New American Library, 1985)

これはインタビューの名手と言われるローレンス・グローベルが、一九八二年十月から翌年十月にかけて行なっ

たトルーマン・カポーティとの面談を、一九八五年に一冊の本にまとめたもので、テープレコーダーを置いての対談を文字にしたものだけに、話は流れるような速さで動いて行く。

対談の中でトルーマン・カポーティがヘンリー・ジェイムズの『ねじの回転』を例にとっているように、一字また一字と筆者が紙へ自筆で書きつけて行った文章と、話した言葉を文章になおしたものでは、違いが起つて来る。殊に、この対談集は、口述筆記ではなく、テープに録音したものを起したものに、言葉の動きは流麗をきわめている。

この面談筆記は、言わばトルーマン・カポーティの肖像画と呼ぶことができるし、自画像、さらには自叙伝と呼んでもよい。

とは言え、いかに言葉を尽くして語りおえたにしても、それが一人の人物の完全な像になりうるものではない。鏡へ向っておのれの自画像を描いてみたことのある者ならすぐわかることだが、一番よく知っている筈のおのれの肖像でさえも、一回一回と、その時ごとに、像はすべて違ってくる。描く人の巧拙にもよう。しかし、巧拙はあるにしても、時を相前後した作品にはもう少し相似がありそうな筈なのだが、描いてみると、そういう訳には行かない。一回一回、いずれもが、その度ごとに違うし、それでいて、そのどれもが、おのれの相貌の何かを映しているに違いない。一番似る筈の自画像でさえそうなのだ。それは、その折々の衣裳とか光線とかに左右されるばかりでなく、その折々の筆者の気持のありようにもかかわるからだ。カポーティにも、この対話に表れていない相貌がまだまだあると思われる。

それにしても、この対談集によって、カポーティの相貌は読者に身近なものとなる。澁むことない言葉の流

ら、人は、カポーティという人物の過去から現在までを、本人の口から聞くことができる。特に、専らこの人の小説を通してだけトルーマン・カポーティを見てしまう異国の人間にとって、この対談集は作家の肉声を聞く思いがする。

テレビで見たことのある人なら誰でも知っている、あの「女みたいな、高いきんきんした声」。それを、グローベルは his high squeaky voice とか his voice was some octaves above tenor と表現し、また a voice so high it could only be detected by a bat とも伝えていた。また、五フィート三インチ、一五八センチ足らずの、ずんぐりしたこの小男を this rotund little gnome と書き、Willow and delicate above the waist, he was, below, as strong and chunky as a Shetland pony とも伝えている。このような描写は、テレビで見たことのある人へもカポーティの人物像を改めて印象づけることになるし、まして、活字や写真でしか知ることのできない者には、この人をいっそう身近に感じさせることになる。

結婚とは名のみで、若くして離婚してしまった乱脈な父と母のこと。そして、南部諸州で過ごした幼い日々のこと。作品の中では「いとこ」であり、「おばちゃん」として『感謝祭のお客さん』に登場するミス・スックのこと。そこには、家庭のぬくもりにめぐまれない幼いトルーマンの淋しさや、それだけに強く慕い求める桃源境が明滅している。

文学作品の中で好きな作品名を質問されると、*Wuthering Heights*, *Pride and Prejudice*, *Gone With the Wind*, *Remembrance of Things Past*, *The Sun Also Rises*, *Look Homeward, Angel*, *The Great Gatsby*, *Tender Is the Night*, *The Heart Is a Lonely Hunter* を挙げた後で、笑いのうちに、自作の *Other Voices*, *Other Rooms* を挙げ、やうに、まだ刊行して

ない *Answered Prayers* までも付け加えているのは、作者のてらいを表している。

こう作品を列挙されてみると、作者の審美性がそこに表れているし、また、この人には、意外に、純で、まともな心根がひそんでいることもわかる。「意外に」とは、本来なら「当然のことながら」と言うべきところかもしれないが、この対談での作者は、談論風発の怪物。この人の作品を日頃読みこんでおらず、この対話だけでカポーティを知る人には、対話での作者の面貌しか浮かんでこず、従って、好きな作品名にしても、「当然のことながら」よりも、そのあくどさに反して「意外に」も、と響くにちがいない。

挙げられた好みの作品名は、いずれもカポーティの心象をよく映しており、激情の中にも、優しさ、寂しさが秘められていると言えよう。

三島由紀夫についてどの程度まで知っていたのか、測る物差はないが、三島が私を知っている以上に、私のほうが三島をよく知っていると語っている。とは言え、三島由紀夫とトルーマン・カポーティという、この二人の派手好みの、演技過剰な者同士が、お互いに相手の作品をどの程度読んでいたのか、二人の接触がどの程度の深さのものだったのかについては、わからない、トルーマンも、そこまでは語っていない。読者は、両者の接点や違いを、夫々の作品を通して読みとるほかない。

三島由紀夫についてよりも、もっとカポーティらしい領域の広さを見せるのは、ビートルズのジョン・レノン夫人オノ・ヨーコ（小野洋子）についての評価、*I couldn't stand her. The Jap. She was always paranoid. The most unpleasant person that ever was, in my opinion. She's a bore. ぐさぐさ。うじったことについては噂しか知らない私は、カポーティがこのようにこきおろすオノ・ヨーコとは、噂から憶測されるような発展家でも飛ん*

でる女でもなく、これもまた「意外に」、日本女性の伝統である控え目な美しき、貞節を備えた人なのかもしれないと想像したくなる。

ローレンス・グロベルが聞き出すことのできたカポーティの物語は、この作家の自壊の物語である。十歳台にして早くも「神童」prodigyとして華々しく人目を惹いたこの人は、『遠い声・遠い部屋』で博した名声におびやかされ、まどわされながら、その名は『冷血』の発表によって、ただに一人の知名な小説家であるばかりか、他の作家が足を踏みこむことのできなかった、上流社交界の名士に成り上がった。

I'm an alcoholic. I'm a drug addict. I'm homosexual. I'm a genius.

こうトルーマンは『カメレオンのための音楽』で自らを語っている。前の三つは異議のない事実であるにしても、最後の、「私は天才だ」と言い切るのは、別の解釈を喚び起すだろう。天才とは何か。天才とは、ほかの人にはやれないようなやりかたで何かを行なえる人のことだとカポーティは言う。そして、この「天才」は、カポーティの言う「芸術家」と一致しているようだ。

トルーマン・カポーティは、過去の人から、二人の人物を「芸術家」として挙げている。オスカー・ワイルドとジャン・コクトー。この二人が、なぜ単なる作家や文学者でなく芸術家なのか。カポーティは「芸術家」なるものを、生きる姿そのものの中に見ようとしている。ワイルドが芸術家なのは、その文学作品に芸術が認められるというのではなく、ワイルドの生き方そのものが芸術だからだと評価する。自分自身を「私は天才だ」「私は芸術家だ」と言い切るのも、中味は同じであって、その中味とは、ほかの作家が踏みこむことのできない世界、社交界の富豪や美女との交際に、そのきらびやかで人を驚かす行動にあるということだろう。

このような「天才」を自称し自賛する者の行き着く所は、どこか。

トルーマン・カポーティとは、まだまだ書ける作家だと私は思っていたが、この人の「天才」「芸術家」意識が示すように、あまりにも多方面に才を使いすぎた。テレビへも出すぎたし、芝居へも口を出しすぎ、もちろん社交界でも花形になりすぎた。労費である。ローレンス・グローベルが引き出した「天才」「芸術家」の語りは、世の名声とか多才とかいうものが、本人にとっていかに恐ろしい毒でありうるかを示している。

ランダム・ハウス社との契約はもっと前にさかのぼるが、私が初めて目にしたのは一九六七年六月二十四日の『パノラマ』誌でのこと。その誌上で、シカゴの女流作家アリス・オールブライト・ハウジは *Answered Prayers* という予定作を報じた。加えて、作家自身もこの作品について多々解説して来た。だが『かなえられた願い』は遂に完成を見ることがなかった。カポーティの物差に従えば、これが完成しなかったのも、この人が「天才」であり、「芸術家」だったことの証左ということになるのだろう。なぜなら、自身が語っているように、『エスクワイア』誌に分載された『かなえられた願い』は、社交界の味方の面々を敵に廻す結果になったし、そこから起る騒動混乱の中に作者が身を置くこと自体が「天才」であり、「芸術家」なのだからだ。言わば、『かなえられた願い』は、未完に終わったのではなく、自分が選んで未完に終らせた作品であり、そこにこそ天才・芸術家の真価が託されているということになる。

しかし、それは、肯けない理屈である。

トルーマン・カポーティの天才・芸術家論がどうであれ、やはり後代は、この人を一人の文学者として判断し、どのような作品を残したかに判断の基準を置く筈である。そうなると、天才論・芸術家論をどれほど振りかざし

てみても、言っていることは理解できるにしても、後代へのトルーマン・カポーティの評価、位置づけには、つながらなくなる。

自画像が一作ごとに変わりうるように、まして他人の姿となれば、全体像は容易に捕え尽くすことができない。人は、他人さまの姿の、その折々、その角度角度に従って、全体像を捕えたかのように思いがちである。

ローレンス・グローベルが紹介してくれたトルーマン・カポーティの相貌も、これほどまで語り尽くしても、なお、これでこの人の本体が全てわかったと言いつけることはできない。一人の人が持つ奇怪さを、この対話は改めて教えてくれる。

そして、言えることは、この『カポーティとの対話』もまた、語りによるカポーティの作品だということである。ほかの創作と並んで、この作家の言葉の豊饒さを、言葉のきらびやかさを、口を通して読者に示したことになる。例えばマーク・トウェインの語りが『自叙伝』として今日に残っているのと同じように、『カポーティとの対話』もまた、自叙伝が持つ美しさと醜さを湛えながら、これをカポーティの自叙伝としてよい。

(2) ジャック・ダンフィ著『いとしき天才』——「トルーマン・カポーティとのわが生活の思い出の記」、Jack Dunphy, “*Dear Genius*”... *A Memoir of My Life with Truman Capote* (New York: McGraw Hill Book Company, 1987)

ジャック・ダンフィと言えば、トルーマン・カポーティにとって二人目の同性愛の相手で、二人が出会ったのは一九四八年秋十一月、トルーマン二十四歳、ジャック三十四歳の時。そのすぐあと、一九四九年二月二十六日には、二人はクウィーン・メリー号でヨーロッパへ九か月の旅に出ている。二人の結び付きはトルーマンの死ま

でほぼ三十五年間続いた。

こう言ってから、更に『いとしき天才』―「トルーマン・カポーティとのわが生活の思い出の記」という書名と副題を読めば、「これはすごいことが書いてあるぞ」と好奇の思いが先に湧いて来る。

ところが、読んでみると、トルーマンにかかわる記事は、本文二百六十七ページのうち僅かしかない。本文の大部分はジャック・ダンフィの創作で、その合間に点々とトルーマンにかかわる文章があるだけなのだ。創作と見えるのは、あるいはトルーマンにかかわる仮名を使っている文章なのかもしれず、そのどこかでトルーマンと結びついているのかもしれない。然し、そんな隠れた結び付きがひそんでいるにしても、読者からは、それがわからない。

それなのに、著者はなぜ『いとしき天才』という書名を付け、「トルーマン・カポーティとのわが生活の思い出の記」という副題まで付けたのか。

これは、察するに、ジェラルド・クラークが『トルーマン・カポーティ伝』に精力を注ぎ込んでいるのを知って、ジャックとしても、少しはトルーマンについて語っておかないと自分の立場が無くなると考えたためかもしれない。トルーマンとジャックの間が一九五二年頃からとうに冷え、後年トルーマンがウォッカと麻薬漬けになっ
てから、ジャックはトルーマンを庇うことが少なくなっていたことは、周囲の人たちの既に知る処だった。だからと言って、ジャックにしてみれば、自分が晩年のトルーマンにつれなくしてたと受け取られるだけでは身の置き所がない、やはり何かを語っておかなければというところなのだろう。

それにしても、ジャックがトルーマンについて露な事どもを綿々と綴らなかったのは、なぜだろうか。

理由は二つ考えられる。

その一つは、ジャックが、自分も物書きだという自尊心を持っていることだ。ジャックはトルーマンにとって先輩作家であり、二人がめぐりあった時、*John Furry*という作品を早々と単行本にしてもいた。そのジャックが、たとえ長年の同性愛の間柄とはいえ、事を露に書くなど、できるものではない。筆を取るなら、やはり創作家としての立場から書く。読者の好奇心を満たすためにだけ筆を取るようなことはしない。それが創作にあたる者の存在価値なのだ、というところだろう。

もう一つの理由は、二人の関係が実はもう形だけのものになっていたから、トルーマンが他界した後、今更その晩年を描こうにも、切実な情感は湧いて来ようがなかったということかもしれない。

こうして、ジャック・ダンフィのこの本は、期待ほどの事は何も見せてくれない。とは言え、ほぼ三十五年間の同性愛の仲であり、処々にやはり注目したい文章はある。それを十三項目だけ挙げてみよう。

- 1、たとえば、母親のアルコール中毒をつぶさに見てきたトルーマンは、「飲んだくれ」を毒のように憎んでいたこと。それなのに、自らもアルコールに慰めを求めるようになってしまったこと（六十頁）。
- 2、日本嫌いだったこと（七十三頁）。
- 3、トルーマンが書いた物語は、つまるところ「子供の物語(child's story)だったこと（八十一頁）。
- 4、母ニーナと、二度目の夫ジョー・カポーティの実態のこと（百二十三―百二十八頁）。
- 5、トルーマンは外づらとは違い、自制心が強く、悲しみの涙も一筋二筋しか見せず、静かに堪える男だったこと（百三十頁ほか）。

- 6、トルーマンは大変優れた「話の聞き役」(a very good listener)だったこと（百六十四頁）。
- 7、トルーマンにとつて一番身近かなことは、生地南部と、クラッター家殺人事件であり、その次が社交界の美女たち peacocks だったこと（百六十五頁）。
- 8、トルーマンの肉親は拝金家だったが、トルーマンにはストイカルな処があり、貧にも安んじることのできる人だったこと。独学独創の人だったこと（百七十五頁）。
- 9、トルーマンが誰よりも情の厚い人で、他からの愛情、思いやりに飢えた孤独な人だったこと。（百八十八頁）。
- 10、二人の最初のめぐりあい。ジャックがトルーマンとの同性愛に走った背後には、ジャックの妻ピーチ（実名はジョーン・マックラッケン）の不貞があったこと。トルーマンとの初のヨーロッパ旅行のこと（二百五十一―二百七十二頁）。
- 11、トルーマンには「理想」が乏しかったため、薬物に溺れてから自力で自らを救うことができなかったこと（二百三十七頁）。
- 12、トルーマンの飲酒無免許運転とその裁判のこと。妻の不貞背信により、ジャック・ダンフィ自身から「無言の信頼」「あけすけさ」が消えてしまったこと（二百五十九―二百六十二頁）。
- 13、そして、最後の五十二章は、二人の間が既に事切れていたこと。死へさまようトルーマンとジャックは、もはや無縁の者同士だったこと。

たとえば右のように要点の幾つかを指摘した上で総合してみると、トルーマン・カポーティほどにまで数多く

の有名無名の友人知己を持っていた人、そしてジャック・ダンフィのような生涯の同性愛の相手を持っていた人であっても、本当の友は居なかったこと。ジャックでさえもトルーマンの本当の胸の裡は知らないのだということ。ジャックでさえもトルーマンを知り尽くしていたわけではないし、ジャックに知らない部分があまりに多くあったことーを示している。トルーマン・カポーティが、その末期に、ジョアン・カースンのような女のもとへ転がり込むことができたのは幸いである。やはりジョアンはトルーマン・カポーティから最後に信頼された人だったと言える。

なお、この『いととき天才』はジャック・ダンフィの才が、作家と言えるようなものではないこと、作家としての資質は乏しいことをも露呈している。たとえ暴露とか綿々たる記事とかを書かないにしても、控えた筆の中に滋味あるものを書けた筈なのだが。ジャック・ダンフィは貧しい生まれでもハーバード大学の出であることが文中からわかるが、この人が小説家を志し、作家を自称したのは、方向を誤ったのではないのかと思われる。

(3) ジョン・マルカム・ブリニン著『トルーマン・カポーティー思い出の記』 John Malcolm Brinnin, *Truman Capote: A Memoir* (London: Sidgwick & Jackson, 1987)

これは一九八二年に*Sextet*という題で出版し、それへ大幅に手を加えて一九八六年に*Truman Capote: Dear Heart, Old Buddy* (New York: Delacorte Press / Seymour Lawrence, 1986) として刊行したものと同一の本。「思い出の記」とあるように、気楽な読み物である。著者はバツサー女子大学で教鞭を取っていた。トルーマンの最初の同性愛の相手となったスミス女子大学教授ニュートン・アービンとは同業友人の間柄だった。ニューヨーク州北部ヤッ

ドーの芸術家村へ登場した二十一歳のトルーマンをブリニンを知っている。後に教職を去り、詩、伝記、歴史、評論と、文筆に打ちこみ、トルーマンをマンハッタンの「青年男女へブライ協会」ポエトリー・センターへ招いて、朗読を依頼したこともある。ローレンス・グローベルとの対話では、トルーマンは、ブリニンなんて人は知らない、と言った調子で無視しているが、ブリニンはそのことを著書の中で軽く受け流している。トルーマンを知る人は多く、さまざまな角度から書けることを証す一例と言えよう。

(4) ドナルド・ウィンダム著『友情への脚註』―「トルーマン・カポーティほかの思い出の記」 Donald Windham: *Footnote to a Friendship: A Memoir of Truman Capote and Others* (Verona MCMLXXXIII, 1983)

副題に「トルーマン・カポーティほかの思い出の記」とある「ほか」とは、映画俳優モンゴメリ・クリフト、劇作家テネシー・ウィリアムズなどで、大部分はトルーマン・カポーティにまつわることが書かれている。

『友情への脚註』という書名は妙な書名だが、読んで行ってみると、なるほど、巧い書名をつけたなど肯ける。つまり、三十五年間に及ぶトルーマンとの友情にも但し書きが要る、友情は友情でも別の目もある、トルーマンはトルーマン、私は私で、トルーマンが言う通りに私がトルーマンを見ている訳ではないところだ。それを一口で言えば、これは「トルーマンの嘘」を書き綴った書である。トルーマンは本当の中に嘘を、嘘の中に本当のことを入れて書き、話すことの巧みな男だったから、書かれ語られた全てを本当のことと思ひこむのは誤りで、そんな「嘘」を「脚註」として付けておこうという狙いである。

著者のこうした脚註を次々に見て行くと、なるほど、そうもあろうかと思われるが、また、それだけに、著者

とジャック・ダンフィとの違いもはっきりして来る。やはりジャック・ダンフィは心得た人だなということが明らかになる。ジャックにとっては、もしトルーマン・カポーティの裏を暴いたり、ある事、ない事を書きつらねたりするつもりなら、書く事は幾らでもあっただろう。だが、そこは、ちゃんと抑えている。いちいち、あれこれと書きつらねて、トルーマンの非を披露するようなことはしない。非を挙げるつもりなら、あまたあったにちがいないことを読者は知りながら、それを敢えてしなかったジャックを、よしとして認めないわけにいかない。ところが、ドナルド・ウィンダムとなると、いちいち、あれも知っている、これはこうだと、知らないことはないかのように綴りながら、さて事実はどうかとなると、必ずしもはっきりしていない。そして、その上で「脚註」を付け、トルーマン・カポーティの嘘、偽りを列挙する。初めは読者として、なるほどと首肯するにしても、それが続くと、そんな事のほかに伝えることがないのかと思うようになり、更に、著者自身がカポーティについて何を知っているのか、さして知りもしないのに、知ったかぶりをしているのではないのかと、著者を疑い、トルーマンだけでない、この人にもまた嘘があり、偽りがあるにちがいないと思うようになる。

ジャック・ダンフィとドナルド・ウィンダムとは、執筆態度が正反対である。前者は、それほど知っていないかのようなそぶりだ、大まかに捕える。後者は、知らないことは一つもないかのように、細かく捕える。そして、前者の場合もそうだったが、ドナルド・ウィンダムの場合も、実は、いかにトルーマン・カポーティを知らないか、ということが明白になる。一人の人物を知り尽くすことは容易ではなく、まして、トルーマン・カポーティのような、人物の出入りだけでも多面にわたる人については、知り尽くすことは容易ではない、知ろうとすればするほど、知らない事が多すぎるということが、わかってくる。文字通り、トルーマン・カポーティ像の陰の脚

註の一つとしてこの書を扱うのが至当な処だろう。

(5) ジェラルド・クラーク著『カポーティ伝』 Gerald Clarke, *Capote: A Biography* (New York: Simon and Schuster, 1988)

雑誌『タイム』に腕を振るっていた著者が、八年の歳月をかけて調べあげたカポーティ伝で、トルーマンもローレンス・グローベルとの対話で、私よりも私をよく知っている男と言った、その人の作品 資料出典を詳しく挙げ、索引もある優れた伝記で、職業柄「読ませる」ことを心得た、達意の文で、一読すべてカポーティがわかったという気持ちに読者をさせる。そこが、よくもあり、巧いところでもある。もっとも、カポーティから「お墨付き」のような言葉があっただけに、過信に陥らなければよいがという危惧は湧く。ほかの誰よりも私がトルーマンを一番よく知っていると言いたいだろうが、トルーマンと苦楽を共にした人ではないので、外から理解することはできても、トルーマンのふところへ入って共に感じることはできなかったと思われる。その点では、男にせよ女にせよ、トルーマンを書く適材は、ほかにいる筈で、トルーマンの血肉を嗅いた人々が、これからも内側から書いてくれることが望まれる。いづれにしても、トルーマン御本人は、もうあの世の人だから、この伝記は存命中に調べた伝記として、今後なんぴとも覆せない強味を持っている。

一人の作家の編年体の伝記としてだけでなく、伝記文学としての面白味も備えた大著である。

(6) マリアン・エム・モーツ著『トルーマン・カポーティの南部の歳月』「あるモンロービルのいとこが語る」
訳 Marianne M. Moates, *Truman Capote's Southern Years: Stories from a Monroeville Cousin* (Tuscaloosa and London: The University of Alabama Press, 1989)

トルーマンの母方のいとこジェニングズ・フォーク・カーターが語った話を録音テープから起したもので、四歳の時に生地ニュー・オーリンズから母の里アラバマ州モンロービルに移り住み、ここが生涯の古里となったトルーマンの幼い日々を綴ったもの。モンロービルの町から更に奥へ入った寒村。そこで共に育った竹馬の友同士遊びの様子が具体的に語られている。南部の農村とはどんな世界だったのか。経済恐慌の頃はどうか。心か。外界とは絶縁されている片田舎の少年が、ニューヨークの学校へ行くことになり、やがて寵児となって、心の水源から離れて行く。その水源の部分が平明に描かれている。母方の家系図が添えられていて、たとえば、あのスックがトルーマンにとってどういうつながりの人なのかもわかる。カポーティの根の部分を知るのに好都合な語りである。

(7) 拙著『トルーマン・カポーティ研究』へ増補版（東京・南雲堂・一九八五年）の「カポーティの死―増補版刊行にあたって」に書いたように、カポーティと面識の無かった私に、あるいはカポーティと会うことが出来たかもしれないきっかけが一度だけあった。それは、ニューヨーク市コロンビア大学東亜図書館長甲斐美和さんから同図書館内で紹介されたドナルド・キーン教授を通じてで、もし私がすぐその気になってキーン氏にカポーティへの紹介を依頼すれば、事は実現していたかもしれないかった。

然し、私はすぐその気を起さなかったのだ。そして、その後も気持は動かなかったのだ。

最近 Donald Keene, *On Familiar Terms: To Japan and back, A Lifetime across Cultures* (New York・Tokyo・London: Kodansha International, 1994)を読んだ際、三島由紀夫とトルーマン・カポーティの関係に言及した中で、キーン氏が Capote was surely one of the most disagreeable and untrustworthy persons I had ever met. とその二百三頁で書いていたのを知って、私はやはりキーン教授にカポーティへの紹介の労を取ってくれるようあの時依頼しなくてよかったのだということを知った。もしキーン氏に仲介の労をお願いしていたら、どれほどキーン氏に嫌な思いをさせていただろうか、たとえカポーティとの面会が実現しなかったにしてもだ。

それで私は、やはりトルーマン・カポーティを、本を通じてだけ知ってきたことを、それでよかったのだと思うに到った。

作品の中ではないかにも人なつくこく懐しさをおぼえる人でありながら、現実の対人関係ではその対極に立つ人。これは、トルーマン・カポーティだけではあるまい。然し、作品の中で想定されるカポーティ像は、あまりにも人なつこい像であるだけに、日常生活の中でその対極の人物に会うことは、望ましいことではない。

作品の中で見せるアラバマ州の故郷への思いと、故郷との現実の結びつきと。そこに落差があったのと同じように、カポーティの人間像にも相反する面があったことを思い知らされる。

二、トルーマン・カポーティ研究の果に

第二次世界大戦末期のことである。

そのころ国民学校と改称されていた小学校の、四年の一人の女の子は、両親が住む都会を離れて、遠縁の親類へ疎開して行った。深い谷あいの農村で、天秤棒の前後へ桶を吊るし、毎日水汲みに行くのが、この子の仕事になっていた。泉は山をずっと下ったところにあつた。慣れない腰つきで、初めは桶の底へほんのちよつぱり、それからだんだん水の量を殖やして、どうやら子供の規定量を担ぎ上げられるまでになった。そうなるまでに、彼女は桶へ水を少し入れて、人目をばばかり、夜、暗い坂道を上り下りして、一人前の量を担ぎ上げられるようになろうと練習をくりかえした。その往き帰り、少女はお宮の杉木立をとつた。杉は高く高く聳え、白い空が垣間見えた。彼女は足裏の感と空の白をたよりに歩いた。杉は太く、枝が折れ、空洞がある。昼間でも見透かせない梢を、何か怪しげな影が飛び交っているのではないか。「モモンガアがいるんだぞ」土地の男の子たちが言った。「モモンガアが飛ぶんだぞ」。女の子はこの奇怪な名前に、人間に付きまとう、醜悪で恐怖に充ちた何かを感じとつて、その名を聞いた時に空を仰ぎ、それらしい影を追った。モモンガアが目に入つたためしはなかった。しかし、少女は、お宮の杉の森とおるごとに、背後から、頭上から迫る無気味な空気の流に、ふと失神するようない思ひをしながら影の手につかまるまいと足を速めた。そして、それがたび重なると、まだ見たこともないが、モモンガアをめぐる何やかやは、そのどこまでが本当で、どこまでが作りごとなのか、わからなくなった。

トルーマン・カポーティの世界は、これと似て、現実と非現実の境界線がまことにもうろうとしていて、彼の短編「ミリアム」「夜の樹」を読んだ者は、沈滞した空気の中に悪魔の無気味な手招きを感じながら、いったい作品の中の出来事の、どれが事実で、どれが頭脳をかすめた幻想だったのかを読み分けようとして、読み分けることができない。……

トルーマン・カポーティについて初めて小論をまとめた時、私はこのようにして書き始めた。この少女は私の愛妻であり、村は神奈川県津久井郡青根村上野田（うえのだ）。実話であり、実体験である。

カポーティ死後の今振りかえれば、この小論を書いた頃のカポーティは、生涯のうちに、いちばん得意の時期にいたことになる。

他界した今、残された作品をかえりみて、どういう判決を下したらよいだろうか。

この作家の名前を耳にしたのは、わが国が敗戦の中で右往左往し、外貨不足で洋書を輸入できない頃だったから、その頃このかた、この人の動向を追って来た私にとっては、判決めいたことも述べたくなる。正直言って、この人はまだまだ書ける人だと思えた。初期の作品には、得体の知れない、支離滅裂とも取れる部分もあったが、それでも、閃きを感じさせるものがあつた。まして、十年に一作本当によいものを出せばそれでいいんだと揚言誇示していたのを見れば、まさにそこそがあるべき作家の姿、それでこそ大作を産む者のよき心がけだと映り、作者への期待は深まった。

然し、その十年が過ぎて、まだ何の形もなさないのを知るに及んで、期待は危惧へ、そして失望へと変り、作者の誇示は、空しい虚言と思えるようになってきた。

いったい、どうしてこの人はこのようになってしまったのだろうか。

この人には、もともと、大作を組み上げるような論理性は欠けていた。『遠い声・遠い部屋』の、踏み迷う歩みは、そのことを語っているし、『冷血』は事実譚であつたればこそ、あそこまで追い詰めることができたのだ。

想像の世界で『冷血』に並ぶ建物を組み上げることは、この人の得手ではない。ところが、『冷血』での世俗の成功は、この人を、やれ非虚構小説の、やれニュー・ジャーナリズムのと、お題目を唱えさせるにいたり、本人がそれを口にすれば、マスコミもそれをことごとく書きたてる。果は、石部金吉の学者先生までが及び腰になって、カポーティよ、ニュー・ジャーナリズムよと、もてはやして、おのれも時の寵児にあやかうとする始末に立ちいたる。

今になってわかることは、たとえば「ミリアム」や「夜の樹」にしてからが、その水源になっているのは、この人の中に終生まといついていた幼い日の恐怖に満ちた体験だったということ。幼い日々の、この暗く、淋しく、幻想を掻き立てる体験。見捨てられ、置き去りにされ、あるいは閉じこめられた幼い者の思い。それが「ミリアム」の、そして「夜の樹」の、水源になっていた。だから、この作家の本領はと言えば、ほかならない、幼い日々の思いとかかわりのある世界を書き継ぐことにあつた筈だ。そうして見れば、作者の本領は、『草の堅琴』にあり、『クリスマス』の思い出にあり、『感謝祭のお客さん』にあり、死の前の『あるクリスマス』にあつた筈だ。『カメレオンのための音楽』の中の数篇も、明らかに、この種の中に入る。創作そのものに映るかに思える。『夜の樹とそのほかの物語』や『遠い声・遠い部屋』でさえも、その本源は、やはりこの人の幼い日々にある。長ずるに従い、おのれの人付き合いが広がるに従い、作者は、得るところよりも、失うところが多くなった。悪く言えば、成長することのない作家だった。

このことは、然し、トルーマンについてだけ当てはまるわけではない。物書きであるにせよ、文筆とは縁のない人であるにせよ、おのれが心の古里とも思える世界が、年を経るにしたがい、失われ、崩れ去り、消えて行く

ということは、ありうることだ。今描いている世界が永遠にそのまま保ち続けられるということは、この世にはありえない。少くも、変貌し、そして、やがては潰え去る。それでも、一人の人は、生のあるかぎり、おのれの心に古里を想い描くことはできる。

古里は、美しくのみある必要はない。醜く、うすぎたなく、荒寥としていても、古里は古里であり、人は、そこから離れ切ることとはできない。それこそが、古里が持つ意味なのだ。トルーマン・カポーティは『冷血』でも、その最終場面で、彼の古里の原風景を描いてみせた。あるいは、みせるほかなかった。避けることのできない、作者の故郷への歩みなのだ。それにも拘らず、トルーマンは、非虚構小説の、ニュー・ジャーナリズムのと、お題目を唱えて世を湧き立たせ、自分もまたその喧騒の中で酔っていた。

後になれば何ということもない。残るのは宴の後の空しさだけではないか。おのれの水源を忘れたのか、忘れるようとして逃げ廻ったのか。終生彼を苛み続けたと言われる、幼い日の淋しい思いに立ち向い続けてこそ、この人の作品世界はみずみずしくありえた筈なのに。

『冷血』を書くのもよかっただろうが、もし作者が名士としてうつつをぬかしたりすることなく、直ちに心の古里へ帰っていたら、この人は、まだほかにもよい作をなしたにちがいないのに。『冷血』の後の、空白とも呼べる日々は、かえりみて悲しい。あるいは、作者にとつて、それよりほかになかったのかもしれないが、ストイカルでもありえたと言われるこの人が、虚名に溺れることなく生きていたらと、空白の歳月が惜しまれる。

文学者としてのトルーマン・カポーティと言えば、後代は『夜の樹とそのほかの物語』を、『遠い声・遠い部屋』を、『ティファニーで朝食を』を、『冷血』を、文学として整った姿の故に看板作として挙げるだろう。然

し、本当にこの人を語る作品とは言えば、それらの作品ではなくして、『草の堅琴』であり、『クリスマスの思い出』であり、『感謝祭のお客さん』であり、『カメレオンのための音楽』の、作者に身近な小品であり、衰えてはしまったが『あるクリスマス』である。こうした作品を書く作者は、淡々として無技巧に見えるが、そう読者に感じさせるほどの筆は、無技巧だけのわざではありえない。作者の回復力が、こうした世界にあったことを考えれば、トルーマン・カポーティは、おのれの宝庫を見失ったのか、水源が涸れてしまったのか、それとも、水源は元のままでも、それを汲み上げる力を失っていたのかと、なお未完を思わせるその生涯が空しいものと思われる。

（英米文学科 教授）

トルーマン・カポーティ研究の結び（稲澤）